

悲運な付箋

満州の切手、エンタイアを集めて40年が過ぎた。特に開拓団の手紙を手にする機会はたびたびあり開拓団の消印も少なく種々バラエティーがあり興味があったが、その手紙を手にした時、この差出人は無事内地に帰国できたのかどうか気になる事もあった。今回示すハガキは昭和24年6月20日の消印で舞鶴引揚援護局気付の付箋付ハガキで引揚に際し、本人に手渡しができなかった文書がかかれており、差出人に返却された物である。

日本の戦後史を物語るエンタイアとして、私は忘れる事のできないハガキであると同時に貴重な資料と考える。右下の4ケタの数字は局の整理番号であろう。

秋吉 誠二郎

